メルロ＝ポンティにおける意味と存在論に関する一考察
——古代印欧語を手がかりに——

井川　義次

凡例

以下、拙論において取り上げるメルロ＝ポンティの文献のうち、邦訳のあるものについては先学の訳業を尊重し、十分参照させて頂いたが、行論の都合上、文体や用語の統一の観点から、語句の変更を行った箇所があることをお断りしておく。なお本稿におけるメルロ＝ポンティの引用・参考箇所は、以下の略号によった。

SC: *La structure du comportement*, Paris, PUF, 1942. 滝浦静雄、木田元訳『行動の構造』(みすず書房、1964)

PP: *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945. 竹内他訳『知覚の現象学（一）（二）』（みすず書房、1967, 1974)、中島盛男訳『知覚の現象学』(法政大学出版会、1982)

S: *Signes*, Paris, Gallimard, 1960. 竹内芳郎監訳『シーニュ（一）（二）』(みすず書房、1970)

OE: *L'oeil et l'esprit*, Paris, Gallimard, 1964. 滝浦静雄、木田元訳『眼と精神』(みすず書房、1966)

VI: *Le visible et l'invisible*, suivi de notes de travail, Paris, Gallimard, 1964. 滝浦静雄、木田元訳『見えるものと見えないもの』(みすず書房 1989)、中島盛男監訳『見えるものと見えないもの』(法政大学出版会、1994)

はじめに

本稿ではメルロ＝ポンティの哲学について、意味論と世界へと向かう両義的存在者の運動性に焦点を当てて、その時代的発展の跡をたどりつつ、多様な次元の意味の生成を可能にする「存在」の性格について考察しようと思う。

その際、メルロ＝ポンティ固有の意味論の形成を導いた現代フランス語の sens という語の来歴について一瞥し、さらにその存在論を照射し、理解を深めるための一助として、古代

印欧語に特有な動詞「中間態」の問題について検討を進めてゆきたい。またこの問題を考察するに当たっては、メルロ＝ポンティが参照した可能性のあるカッシーラーによる論述を参考として見てゆくことにする。

1　世界内存在と知覚

ここでは、メルロ＝ポンティの前期に属する著作である『知覚の現象学』における知覚的身体の世界へと向かう動的な志向性と、それを通じて生成する意味の問題について取り上げたい。メルロ＝ポンティは主体となるものは、意識や精神であるよりも前に、まず身体であると説く[1]。すなわち真の知覚の主体は身体であって、この身体の働きのおかげでわれわれに実存の「地」が与えられ、コギトもまたその実存の地を土台にしているというのである。「現象学的世界とは、なにか純粋存在といったようなものではなくて、わたしの諸経験の交叉点で、またわたしの経験と他者の経験との交叉点で、それら諸経験の絡み合いによってあらわれてくる意味なのである」と彼は主張する（PP XV)。すなわちメルロ＝ポンティにとっては、コギトも身体性を不可分な形でもつのであって、これを介して経験的世界と交叉する「両義性」(ambiguïté）を有するものである。

現象世界の「意味」とは、自他などの諸経験の相互作用の交叉点から生起する、「地」あってこその「図」としての意味である以上、その在りようは、けっして独立自存の閉鎖系では起こり得ない。さらにわれわれは空間性のみならず、時間性においても開かれている。「われわれは理解しがたい仕方で受動性に結びつけられた能動性であったり、意志によって超越された自動機械であったり、判断によって克服された知覚であったりするのではなく、われわれは全く、能動性であると共に、全く受動的なのであり、それはわれわれが時間の出現そのものだからである」(PP 489)、つまり、われわれは、意識にも知覚にも極限されず、能動性にも受動性にも一義的に固定化できない存在者として、時間性を帯びて現象しているのである。意味を生み出す主観性も、与えられた特定の実存の地平に内属しており、そこからの超越を継続する特質をもっている。こうした在り方こそ、時間性の「脱自」(ek-stase）の構造に他ならない。メルロ＝ポンティはこの点から、思惟の孤立化と、究極的な還元の不可能性についてつぎのように述べている。すなわち、「われわれは世界の内へと存在しているのだから、また、われわれの反省さえもが、自分のとらえようとしている時間的流れのなかに自ら身を漬けているのだから（フッサールの言うように、反省は流れてゆく sich einströmen ものだから)、われわれの一切の思惟を包摂するような思惟なぞは存在しない」のであり、そうである以上、「完全な還元は不可能」なのであるとも断言しているのである（PP IX)。

ついでメルロ＝ポンティは、「すべての判断に先立ってすでに働いている作動的志向性」「感性界のロゴス」「人間の心の奥底に隠されている技術」なるものを、可能性の制約として取り

上げ、そこから意味作用ないし意味付与（Sinn-Gebung）といったすべての能動的作業、作用志向性、定立的志向性が起こってくるのだと説明する。メルロ＝ポンティにとって「意味」とは、そうした可能性の制約としての地平との連動から生ずるとらえられていたことになるのである。すなわち「われわれがそれを或る観点、或る距離から、或る向き（sens）で見つめる場合、一言で言えば、われわれがわれわれと世界との馴れ合いの関係をその光景に奉仕させる場合にしか開示されないのである」（PP 491-492）と述べ、「意味」とは前人称的で匿名の世界に属する存在者の、世界に内属し、世界へと向かう（être au monde）、特定の方向性・運動性を帯びた知覚によって生起するものと説いているとおりである。

2　「意味」そのものの両義性

さてメルロ＝ポンティにおける世界に属し世界へと脱自する知覚主体に基礎をおくこうした動的な意味論はいかにして生じたのであろうか。もとより独創的な思想家メルロ＝ポンティのオリジナルな哲学的思索それ自体にもとづいていることは確かである。ただ、このような発想を意識下で導く根拠があったかも知れない。ここでただちに想い起こされるのは、もちろん sens という現代フランス語のもつ多義性である。すなわち辞書的に sens は、一方には「知覚」「意味」、他方には「方向」「道筋」「布地の織り目」等の含意がある。このような意味・知覚―方向・運動性の複合したニュアンスをもつ語自体がメルロ＝ポンティを導いた一要因であったであろう。メルロ＝ポンティは現代フランス語 sens のもつ意味合いを最大限活かして、自らの哲学的思惟を展開させたわけである。

ところで、実はこうした一見、相異なる含意は偶然によって生じたものではなく、まったく別個の源泉に由来するものであった。すなわちその一つはフランス語の直接の祖語に当たるラテン語の「意味」「知覚」を表す語、sensus である。この語には本来、「方向」の意味は含まれていなかったが、これに古代ゲルマン語の「道筋」「方向」を表す sinno という語が、のちに形の類似のゆえに合流したのである[2]。つまりこのような歴史的経緯によって、フランス語 sens にラテン語由来の「意味」の他に、方向性・運動性のニュアンスが与えられることになったのである。かくして sens 自体が思いがけぬいきさつから両義性を孕むに至ったわけである。そしてこの sens という運動性と融合した「意味」の語こそが、結果的に、最晩年に至るまでのメルロ＝ポンティの思考の導きの糸となったのである。

3　言語、再帰性

メルロ＝ポンティは、一定の思考レヴェルの具現化には言語の獲得が重要な働きをなすとして、言語をも身体的行為、表現の一環ととらえ、思考を実現する身体表現として考察を進

めた。『知覚の現象学』におけるメルロ=ポンティの言語論では、言葉もこうして身体表現としての所作のうちに含まれるとされ、絵画・音楽と同じく、それ自体でそれ固有の「意味」を表出するものと見なされていた。

その後『シーニュ』など中期の作品において、ソシュール言語論の影響がメルロ=ポンティ言語論に見られるようになり、言語と意味作用、意味の超越、言語の間接性とその沈殿と再活性化の力動的作用などの問題が論じられるようになった[3]。メルロ=ポンティにおけるソシュールの影響の一例としては、彼が言語の示差性原理について言及する箇所からもうかがえる。「われわれがソシュールから学んだのは、記号というものが、一つずつではなにごとも意味せず、それらはいずれも、ある意味を表現するというよりも、その記号自体と、他の諸記号との間の、意味のへだたりを示しているということである。これは他の記号についても同じことが言えるのだから、言語は、名辞なしの様々な差異によってできているわけである。もっと正確に言えば、言語における名辞とは、各名辞間に現れる差異によってのみ生み出されるのである」(S 49)。このようにメルロ=ポンティにとって、意味作用は記号と記号との間の弁別的な差異の関係無しには現れず、他を前提とし、一々の語自体がポジティヴに意味を表出しているわけではないのであり、そこから、意味とは「さまざまな語の交叉点に、いわばそれらの中間にのみ現れる」(S 53) のだと主張したのである。

メルロ=ポンティは、こうしたソシュール言語学の示差性の原理と関連づけて、自己と他者をも名辞間の関係のように、存在論的偏差として把握し、示差的に現れるものであると述べている。各々の記号は他の記号に対してその差異しか表さない弁別的なものであるが、これと同様に「主体」なるものも特定の言語に依存して思考する以上、その存立には超越論的主観性に先立つ社会における複数の他者との言活動が前提されなければならないことになる。こうして主観の意識が他者、社会、言語等々の背景からけっして独立し得ないものであることから、メルロ=ポンティは「わたしが他人の語るところを了解する限りで、わたしはもはや誰が語り手で誰が聴き手であるかを知らない」(S 121) といった事態が起こるのだとも述べているのである[4]。

メルロ=ポンティ中期の思想においては、こうした言語論をはじめ、他者の行為と自己の行為とが不可分に交叉する世界について考察されている。そこにおいて彼は、フッサールの『イデーン』「局在する諸感覚 (すなわち再帰的感覚 Empfindnisse) の担い手としての身体の構成」[5]のうちに現れる右手と左手の再帰的感覚の転換の比喩を援用して、思索を展開している。それは、例えば「わたしの右手がわたしの左手に触れるとき、わたしは左手を「物理的な物」と感ずるが、しかし同時に、わたしがその気になれば、まさしく、わたしの左手もまたわたしの右手を感じはじめる、es wird Leib, es empfindet〔それが身体になり、それが感じる〕という異様な出来事が起こるのである」(S 210)という身体における能動的主体と、受動的客体の反転の問題に関する論述からもうかがえるところである。メルロ=ポンティはこのヴィヴィッドな比喩

をとくに好んだようで、さまざまな含みをもたせながら、至る所で引用している。このような同一身体の二つの部位の関係性というフッサールの「受動的綜合」につながる問題関心[6]は、やがて自己と他者との相互連関についても敷衍されることになる。「もしわたしが他人の手を握りながら、彼のそこにいることについての明証を持つとすれば、それは、他人の手がわたしの左手と入れかわるからであり、わたしの身体が、逆説的にもわたしの身体にその座があるような「一種の反省」のなかで、他人の身体を併合してしまうからなのである。わたしの二本の手が「共に現前」し「共存」しているのは、それがただ一つの身体の手だからである。他人もこの共現前(comprésence)の延長によって現れてくるのであり、彼とわたしとはいわば同じ一つの間身体性(intercorporéité)の器官なのである」(S 212-213、下線筆者、以下同)。さらにメルロ=ポンティは、こうした共存が可能になり、他のわれ(alter ego)を作ることができるのは、「人間が自己を脱け出て世界のうちにあるからであり、一つの<脱自>(ek-stase)は他の脱自と共存可能」だからであるとする。すなわち、実体的固定化を不可能とする運動、作用があってこそ、間身体性を仲立ちとして「他者」と「わたし」とが共現前できるのだと説いているのである。かくして知覚する主体は他者を「知覚するもの」として「定立」できるのであり、問題はまさに、共知覚(coperception)なのだと述べているのである(S 215)。このようにメルロ=ポンティにとって他者と自己の身体は根源的な「脱自」の運動から、共に生まれ出るものであり、こうした身体的再帰性の運動を共有することによって、間主観性も成立すると理解されたことになるのである。

4 肉の存在論

メルロ=ポンティは後期の作品において、言語のみならず身体、知覚、他者をも含めて規定しているような根源的な自発性の作用があるとの見解を肉の存在論から説明しようとする。

彼にとって重要なのは初期作品以来、知覚であり身体であった。メルロ=ポンティは知覚と運動とは密接不可分の関係にあり、身体は運動において、動かすものであるとともに動かされるものでもあった。このような身体の再帰性の運動を介して「自己」は構成され、また身体を通じて「存在」へと開かれていると述べていた。後期メルロ=ポンティはこのような地平となる「存在」を身体との類比から「肉 chair」とよんだ[7]。そうした「肉」としての存在こそが、他者経験を可能にする超越の基盤でもあるととらえていたのである。メルロ=ポンティは、わたしと他者、わたしと世界との区別は、結局こうした肉的存在の「裂開 déhiscence」の作用から事後的に成立したものであると説く。地と図、主観と客観、自己と他者等々の諸々の「意味」が生起する肉の裂開の様相は、非常に生動的なイメージ喚起力の強いめくるめく言葉のヴァリエーションによって表現されている。たとえば、「可逆性 réversibilité」、「交叉配列 chiasme」、「侵犯 transgression」、「間隙 hiatus」、「炸裂 éclatement」、「分裂 fission」、「編みあわせ entrelacs」、「侵犯・蚕食 empiétement」、「蝶番

charnière」、「接ぎ目 jointure」、「軸 pivot, axe」等々、メルロ＝ポンティの「肉の裂開」論は、存在者の揺籃とも言える「野性の存在」から、多種多様な存在者が立ち現れる躍動的プロセスを明らかにするためのものだったのである。

さてここでは、このような基盤としての肉＝存在の特質を、動態的側面から考察してみたい。まず「肉」についてメルロ＝ポンティはこう語る。「肉＝わたしの身体が受動的でありかつ能動的である（visible-voyant）（見えるものでありかつ見るものである）という、即自的魂であり、かつ所作であるという事実」（VI 324）。すなわち「肉」とは、内外の諸作用が受動か能動か一方に極限されることのない、存在のある様態であるととらえられているのである。さらにこうした「肉」を基盤とする、身体と世界との関係について「感応性 sensorialité」に言及し、それが「身体の *sich*-bewegen〔おのれを動かすこと〕と身体の *sich*-wharnehmen〔おのれを知覚すること〕、身体の自己への到来」であって、身体が身体自身を動かすことを介して自身を知覚することであるととらえていた。そして、そのような身体はけっして孤立したものではなく、「まわりに取り巻きをもち、この取り巻きの裏面であるような自己」なのであって、周囲の世界からは絶対不可分な存在である。つづいて、つねに「地」なるもの「他」なるものを伴うこのような自己は、特定的にこれと規定することを拒むものであると述べられる。メルロ＝ポンティは、「触れるものがいつも、まさにおのれを触れうるものとして把握しようとしながら、その把握に失敗し、或る＜……がある＞（un *il y a*）のうちでしかそれを成しとげられないようなぶれをともなった再帰関係〔le réfléchi en bougé〕であることがわかるであろう。—wharnehmen-*sich*bewegen〔おのれを動かすこと〕と身体の〔知覚すること—動くこと〕の含み合いは思考—言語の含み合いである」として、ここでもやはり知覚作用をもつ再帰的身体が否応なくもたざるを得ない意味の一方的決定の不可能性、意味の不確定性という特質について注意を促しているのである。そこから「肉とは、この円環の全体のことであって、単に時間—空間的に固体化されたこのものへの内属ではない」（VI 313）と説き、上述のように、一定の時空に極限されることのない、再帰性の生ずるある全体的な在りようを、比喩的に「肉」として構想したのである。

つぎに知覚の主体と客体について説かれる箇所を見てみよう。メルロ＝ポンティは、「触れられるもの—触れるもの」の関係について述べ、「この構造はただ一つの器官のうちに存するのである。—わたしの指の肉＝わたしの指の一つひとつが現象的指であるとともに客観的指であり、相互性、交叉配列の関係にある外と内であり、対になった能動性と受動性なのである」と説くが、これは知覚においては、内外・主客の見かけ上の対立も、実は互いに、ただ一つの身体的器官の能動性と受動性のペアに比すべき現象に過ぎないということである。ところでメルロ＝ポンティが述べるこうした肉における「能動」「受動」の作用は、もちろん、「全体」の運動を特定の視座から把握するものである以上、その実、双方とも他方から切り離し得ず、単独では成立し得ない便宜的な概念設定に過ぎない。そのことは、「能動性と受動

性はたがいに蚕食しあっている、しかるに（カントにあっては）両者は現実的対立の関係にある。—指の局所的＜自己＞：その指の占めている空間が感じもするし—感じられもするのだ」（VI 314）との発言からも理解されるところである。こうした感覚における端のない円環的関係をメルロ＝ポンティはさらに、「能動性がもはや受動性の逆ではなくなる」場であるとも断言している（VI 322-323）。メルロ＝ポンティによれば、こうした受動的作用と能動的作用との交叉配列—転換可能性は、「わたし—世界、わたし—他者の交叉配列」（VI 317）である、との言葉からも理解されるように、自他、内外、主客さまざまな状況において現れるものであることになる。すなわち能動、受動の運動が相互に排除し合わない「肉」の円環性こそ、あらゆる対立が生起し、またその転換の可能性を与える基盤であったのである。

メルロ＝ポンティは以上のような存在論の文脈から、「意味」の問題に言及する箇所で、「われわれの能動性の持つ受動性」に関連してつぎのように述べている。「われわれの自発性がどれほど新しいものであろうと、それは存在のただなかで生まれるのであり、それらの自発性が、われわれのうちでしみ出す時間と連動しており、われわれの生のもろもろの回転軸や蝶番に支えられているのであり、それら意味（sens）はある「向き」なのである」（VI 274）。すなわち後期メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』以来の知覚・意味・方向・運動・時間との相関性の問題を、能動—受動が不断に転換する媒介としての肉の存在論という、より根源的、徹底的な視座に基づけて、再び取り上げ、論じなおしたものといえるだろう。

メルロ＝ポンティは他のところでもこのような受動的なものと能動的なものについて再考すべきであると注意を喚起し、「大事なことは、能動的なものと受動的なものとを連帯させている諸概念を再考し、それがもはやわれわれを、存在と真理を説明しはするが世界を考慮に入れないような哲学と、世界を考慮に入れはしてもわれわれを存在と真理から引き離してしまうような哲学との背反の前に立たせないようにすることなのだ」（VI 67）という。すなわち世界と真理とを各々独立した極に固定化して、一方から他方を説明し尽くそうとするような哲学を斥けるべきであって、肝要なのは受動的なものと能動的なものとを相互に連繋、和解させ得る諸概念を構想することであるというのである。

以上から、見るもの—見られるもの、触る—触られる etc.という、原初的な志向作用—知覚作用の、能動—受動関係が絶え間なく反転するプロセスが、この肉の位相の特徴だといえるであろう。このようにメルロ＝ポンティにおける存在論は、能動—受動、自己—他者、内—外、図—地とが相互に浸食しあうキアスム、肉の裂開の在りようを極限までとらえようとする試みであったのである。

5　メルロ＝ポンティの存在論考察の一視点
——古代印欧語中間態動詞——

以上のようにメルロ＝ポンティの意味論は極めて動的なものであって、意味の生成においては他なるものとの連関、地としての存在との関係が絶対必要条件であることを説くものであった。それは反転の現象を主題化していることからも理解される。メルロ＝ポンティはこの事態を強調するために、文法面で主—客、自—他対立図式を前提とする現代ヨーロッパ言語たるフランス語を用いつつ、そうした思考枠組みと言説とが無効化しかねないぎりぎりの局面、あるいは各種対立が交叉する地平に肉薄し、これを能動—受動の相互浸食ないし相即、再帰性、肉の存在等々の極限的表現を駆使して解明しようとしたのであった。

さてこうしたメルロ＝ポンティの「意味」とそれを可能にする地平としての存在を考察するのに参考となり得るのではないかと推測される或る言語学的事象がある。それは古代印欧語に現れる「中間態動詞」、あるいは「中動態」「中動相」〔*F* voix moyyenne〕というものである。構造主義言語学者バンヴェニストによればサンスクリット語、ギリシア語など古代印欧語においては本来、動詞の範疇としては能動態と中間態のみが存在し、受動態は後代になって形成されたものだと言われている—これに対応して、形は受動態だが能動的意味をもつ「形式所相動詞」がラテン語には存在していた。中間態動詞は「再帰」「相互」「所有」などの意味合いを表現し、《自分自身》への志向という共通した性格をもっている。また能動態の動詞は主辞に発して主辞の外で行われる過程を示すのに対して、中間態では、動詞は主辞がその過程の場所、あるいは座であるような過程を示し、主辞の表すその主体は、この過程の内部にあるとされている[8]。のちの西欧近代語においては態は、能動と受動だけとなり、総合的な中間態動詞一語で表し得たニュアンスは再帰代名詞を伴う再帰動詞が分析的に表現するようになった。たとえば「自分（の顔）を洗う」ことを表わすギリシア語 nizesthai は、ドイツ語とフランス語でそれぞれ *sich* waschen, *se* laver と表現されるようになった[9]—ただ、こうした再帰形では自己に関わる行為において、自己自身を対象化・目的語化することを余儀なくされるであろう。

いま参考までにギリシア語の中間態動詞、ラテン語の形式所相動詞のうちからいくつかの実例を取り上げたい。（なお以下に示す動詞の形態は不定形である）

ギリシア語：

「感じる aisthanesthai」,「自身を洗う、入浴する louesthai」,「自分（の顔）を洗う nizesthai」,「現象する phainesthai」,「生成する phyesthai」,「生じる ginesthai」,「出来る dynesthai」,「興奮する mainesthai」,「欲する boulesthai」,「消滅する ollysthai」,「作る ergazesthai」,「接吻する philesthai」,

ラテン語：

「経験する experiri」,「生起する oriri」,「生まれる nasci」,「死ぬ mori」,「努力する conari」,「受苦する pati」,「省察する meditari」,「考える opinari」,「判断する reri」,「思う・判断する arbitrari」,「驚嘆する mirari」,「恐れる vereri」,「怒る irasci」,「忘却する oblivisci」,「想起する reminisci」,「模倣する imitari」,「享受する frui」,「見える videri」,「崇拝する venerari」,「言う fari」,「話す loqui」,「告白する confiteri」,「遂行する operari」,「所有する potiri」,「成就する fungi」,「絡み付く complecti」

これらはいずれも、その内容上、行為が自らに再帰する動作・作用、あるいは自己が、「他」なるもの「地」なるものを、自己と不可分に関わるものとして必然的に要求し、またそこに根を下ろしていることを予測させる動作・作用を表現しているであろう。

能受未分、主体と対象の不可分離性、相互性、再帰性を強調する言語表現を用いたメルロ＝ポンティは自己の思索を展開するに当たって、このような中間態動詞的事態について想到したであろうか？それは分からない。ただ参考までに、メルロ＝ポンティが著作のなかで随所に引用するエルンスト・カッシーラーが、この中間態動詞について言及した事実があるので、以下にこれを取り上げたい。

まずカッシーラーは、行為を純粋に論理的に分析する場合、能動的形式と受動的形式しかないととらえ、それが古代ギリシア語に基づくアリストテレスのカテゴリー表以来の普遍的区別であるとする見解を否定し、つぎのように述べている。「なぜなら、まさしくギリシア語においては、「受動態」と動詞の他の態との区別は形態論的にも意味論的にも明確には貫徹されていないからである。ギリシア語では、受動態は機能的に見ても一部は能動態から、他は中動態から、漸進的に発展してきたにすぎないからである。……この受動と能動との抽象的な対立が欠けているのは、行為そのものとさまざまなニュアンスの違いについての具体的直観がここにはまだ欠けているということによるわけではない。このことは他方において、まさにこのような直観が、能動形と受動形の形式的区別を欠く言語においてしばしば驚くほど多面的に形成されていることがある、ということからも明らかである」[10]。彼はさらに、中動態という言語形式を使用したところに顕著なギリシア語の哲学的性格が見てとれると説く。「中動態を所有し使用したということのうちにギリシア語の本質的で際立った性格を見ようとしてきたのは間違いではなかった。この性格によってこそ、ギリシア語に真に「哲学的」な言語というレッテルが貼られもしたのである。……事実、出来事を主体の固有領域内にあるものと見なし、主体のそれへの内的関与を強調するのが中動態の基本的意味なのである。ヤーコプ・グリムはこう述べている—「……真の本来的な中動態は一般に、内的な魂や身体において生きいきと生起していることを表示するために作られたのであり、あらゆる言語において、喜ぶ、悲しむ、驚く、おそれる、望む、留まる、休む、語る、着る、洗う等々の概

念が驚くほど一致して中動態に属するのもそのゆえである」。……言語がこのような形成作用において示す力は、言語が主体的存在と客観的存在の対立を、二つのたがいに排除しあう領域の抽象的で硬直した対立とは見なさず、この対立を極めて多様な仕方で動的に調停されうるものと考えることにこそあるのだということも認められることになろう。……言語はいわば、それを通じて存在の形式が行為の形式に、行為の形式が存在の形式に関係づけられ、両者がたがいに融合して一つの精神的な表現の統一体になる中間領域を創出するのである」[11]。

以上のようなカッシーラーの中間態の思考形式に関する論述をメルロ＝ポンティが目にしていたのか、またこれに関心を示したか、さらに場合によって自身の哲学に反映したかどうかという問題については誠に遺憾ではあるが、目下のところ、不明である。『メルロ＝ポンティの思想』の著者であり、カッシーラーの『シンボル形式の哲学』の訳者でもあった木田元は、人間的行動のもっとも高次なレヴェルとしての「シンボル的形態」に関して、メルロ＝ポンティ自身は言及しないものの、『シンボル形式の哲学』を参照していた蓋然性が高いと述べている[12]。なお近年の森脇善明の研究によれば、『知覚の現象学』中に引く **Ausdruck, Darstellung, Bedeutung** 等の語が『シンボル形式の哲学』の概念を援用したものであることを明らかにしている[13]。もし森脇の推測通りならメルロ＝ポンティはカッシーラーによる以上の行論に目を通していた可能性が高いことになろう。

もちろん、メルロ＝ポンティは早くから、身体－自然・精神－文化といった図式を動揺させ、われわれ自身があまりに深く世界に取り込まれている事実をより明確に認識することができるためにこそ、むしろ理念性・本質性の領野が必要であり、自他、内外、主客等々の区別とそれらの視座からによる記述が必要なのだと一貫して主張しつづけて来たのである以上、単純に自らの存在論を、能受の対立のない中間態動詞という言語学的範疇の上に定位することはあり得なかったであろう。

ただわれわれにとっては、能受、自他等々がむしろその事後的な痕跡となるような中間態動詞的思考それ自体も、対立を調停、包括する一つのあり得べき視点として、それ相応の位置づけが与えられてよいのではないかと考えられるのである。というのも、メルロ＝ポンティの哲学が語ろうとしたこと自体が、こうした能受未分、主体と対象の不可分離性、再帰性を表現する言語を使用していた古代人の心性にはなはだ近接していたように思われるからである。

注

[1]『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティによる心身二元論の克服の問題については、以下の論文から大いに裨益を受けた。谷川多佳子「デカルトと心身問題—3—デカルトの心身結合からメルロ=ポンティの自己の身体へ」『札幌医科大学人文自然科学紀要』第 24 巻（札幌医科大学、1983）1-8 頁。

[2]"sens"という語の語源については、以下に示す各種語源辞典参照。L. Lebrun and J. Toisoul, *Dictionnaire étymologique*, Librairie Fernand Nathan, 1937. Jean-Patrick Ferrari, *Dictionnaire étymologique de la flore française,* Lechevalier, 1984. L. Cledat, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Hachette, 1912. Oscar Bloch, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses univ. de France, 1932. Albert Dauzat, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Larousse, 1938. Emmanuele Baumgartner et Philippe Menard, *Dictionnaire étymologique et historique de la langue française*, Librairie generale francaise, 1996.

[3]メルロ＝ポンティの言語論については以下の文献参照。加賀野井秀一『メルロ＝ポンティと言語』(世界書院 1988)、長滝祥司 『知覚とことば—現象学とエコロジアル・リアリズムへの誘い』 (ナカニシヤ出版、1999) 、末次弘『表現としての身体—メルロ＝ポンティ哲学研究』 (春秋社、1999) 、森脇善明『メルロ＝ポンティ哲学研究—知覚の現象学から肉の存在論へ—』(晃洋書店、2000)、河野哲也『メルロ=ポンティの意味論』(創文社、2000) 。とりわけ末次、森脇、河野書は、メルロ＝ポンティ中期思想へのソシュール言語学の影響の問題に関して詳しい。

[4]鷲田清一『メルロ=ポンティ—可逆性』(講談社、1997) 第四章、「2 制度化」では、この問題が「制度化」の視点から考察されている。そこではメルロ＝ポンティのいう制度の問題が政治的・社会的な規則や施設のみならず言語や芸術、家族関係、ファッションなど社会生活に内蔵された意味生成の装置をたえず設立しなおしてゆく間主観的な「実践」ととらえる。

[5]エトムント・フッサール原著、立松弘孝 、別所良美訳『イデーン』〈2 - 1〉(みすず書房、2001)、第二巻 36 節「局在する諸感覚 (すなわち再帰的感覚 Empfindnisse) の担い手としての身体の構成」171-173 頁参照。

[6]メルロ＝ポンティは「受動的綜合」については評価しつつも語義矛盾だととらえていた (PP 489)。なおフッサールの超越論的主観との関連については、星敏雄『意味と身体—ハイデッガー、フッサール、そしてメルロ=ポンティ』(弘文堂 1996)、加国尚志『自然の現象学—メルロ=ポンティと自然の哲学』(晃洋書房、2002) 参照。

[7]メルロ＝ポンティにおける肉の存在論についてはとくに、ティリエット原著、木田元、篠憲二訳『メルロ＝ポンティ—あるいは人間の尺度』(大修館、1973) が集中的に論じており、きわめて参考となった。

[8] Émile Benveniste, *Problèmes de Linguistique Générale*, Edition Gallimard, Paris, 1966, pp. 168-175. 岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』(みすず書房、1983) 165-173 頁参照。その他以下の文献参照。ロックウッド原著、永野芳郎訳『比較言語学入門』(大修館書店、1976)、『印欧語』ジャン・オードリー原著、岩本忠訳(白水社、文庫クセジュ 2001)、アンドレ・マルティネ原著、神山孝夫訳『「印欧人」のことば誌—比較言語学概説』(ひつじ書房、2003)、谷武洋『英語にも主語はなかった』(講談社、2004)。

[9]シャルル・ギロー原著、有田潤訳『ギリシア文法』(白水社、文庫クセジュ改訳新版、2004)79 頁参照。

[10] Ernst Cassierer, *Die Philosophie der Symbolischen Formen*, Bd. 1. Die Sprache, Oxford,1923, S. 219. 生松敬三、木田元訳『シンボル形式の哲学』(一) (岩波文庫、1989) 350-352 頁参照。

[11]カッシーラー、前掲書 356-358 頁。

[12]木田元『メルロ＝ポンティの思想』(岩波書店、1984) 79 頁参照。

[13]森脇善明上掲書、第二部「相互主観的世界経験の構造」、第七章「知覚経験」、注 (16)、145 頁参照。

附記：本論文は平成十六年度日本学術振興会科学研究費 (基盤研究 (B) (2)) による研究成果の一部である。

(いがわよしつぐ・琉球大学教授)